

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'88秋

＝第9回大学院共同セミナー＝

●正義と無秩序——21世紀の法哲学への展望——

＝第144回大学共同セミナー＝

●人工知能は感性を持てるか？

●業務通信——夏の多彩な合宿研修から——



Plain living and high thinking

No.112

人工知能と感性

——機械は感性を持てるか？——

中京大学文学部教授 戸田 正直

人工知能と私

科学的心理学には一〇〇年以上の歴史がありますが、心理学でどのくらい人間が分かるようになったかという点、相変わらず分からないことが多すぎます。その一つの大きな理由は、人間が大変よくできたシステムで、非常に奥が深いからです。人間がやってきた科学的の研究の中で一番成功してきたのは自然科学ですが、それは複雑な対象をなるべく簡単なものに分解して研究し、それを再び組み合わせる方法を取ることができたからです。物理学はその典型と言えましょう。

ところが、人間をばらばらに分解してしまうと途端に人間でなくなってしまう。心理学には、複雑なものを複雑なままで研究しなければならぬ宿命があるのです。この点、AI（人工知能：Artificial Intelligence）は非常に役に立つ道具となります。人間の非常に複雑なシステムの場合には、それがどのようになっているのか多少の見当を仮説的に付けなければ調べようがありませんが、こちらが見当を付けたものが正しいかどうかをチェックするために、その仮説的モデルをコンピュータの中にこしらえてみることでできます。それが人間のように動くかどうかを調べることによって、そこから人間理解へのヒントが出てくるわけです。

コンピュータに人間が日常的に行なっていることをやらせるのは、大変難しいことです。専門的なことをやらせることの方が相対的には難しくありません。というのも、専門的な

②

ことはほとんど頭の中で意識してやっていますが、人間が全然意識せずに勝手にやっていることをすぐに知識としてコンピュータに入れることは容易ではないからです。私は、現在人間と普通の日常会話ができる「ねね」というコンピュータの開発を手掛けています。このコンピュータは将来少しは人間とおしゃべりができるようになるかも知れませんが、そうなることも人間と比べたらとてもおかしな会話をすることでしょう。そのおかしさを少しずつ直していけば、AIとしても進歩するだろうし、一方でわれわれの人間理解も少しは深くなるのではないかと思っています。

感性的情報処理とは何か？

人間の感情には、怒りのようなはっきりとしたものから、ムードのように非常にぼんやりしていて一見掴みどころのないものまでさまざまな種類がありますが、感情は人間の持っている大きな特質であり、私は人間を考える上で根源にあるものだろうと思っています。人間が現在のように地球上で大威張りするようにになったのは、群れを作って、何でも仲間同士でやるようになったからだと思いますが、感情を調べてゆくと、その大部分はそのような群れをコントロールするための非常に大切な仕掛けであることが分かっています。感情の一つであるムードが伝染するのも、皆が同じ気分になって同じようなことをやりたがると、集団が非常に整然と行動できるからだと考えられます。

生物は皆それぞれ情報処理を行なっているのですが、なぜ動物が情報処理をしているのかと言えば、自分が生き延びるために情報に応じた適切な行動をとる必要があったからです。生物の進化の頂点に立っている人間の場合も同様です。人間はいろいろな表象を使って外界のモデルを作り、実際にことが起こる前に頭の中でシミュレーションをすることによって、未来を予測することができるようになります。未来が予測可能になると生き延びる能力が急激に増大することは明らかです。感情は、予測を行なって、その状況に対して最も適応的な行動をとる人間の能力と深い関わりを持っているのです。人間の感情の大部分はそうした行動のために頭の中に備わったプログラムだと私は考えています。しかしながら、これはもっぱら数字やシンボルに直された記号の処理を行なっているフォーン・ノイマン型と呼ばれる現在のコンピュータの非常に不得意とするところであり、コンピュータが本物の感情を持つようになるためには、まだまだ大変な時間がかかるだろうと思います。

ダイナミック・スキーマ

——記号とイメージ——

人間は言語を用いて情報処理を行なっている唯一の動物ですが、言語を使う以外にもどのような形の情報処理を行なっているのでしょうか。外界を知覚して、その知覚情報に基づいて作り上げられたイメージが、情報処



理の単位となつていると考えられます。私は、これをダイナミック・スキーマ (Dynamic Schema) と呼んでいます。人間の頭の中には知識の塊としてたくさんイメージが存在しています。例えば、頭の中に犬のイメージを思い浮かべ、そのイメージに吠えさせたり、鳥のイメージに羽を広げさせたりすることが出来ます。言い換えれば、イメージ自身が自由により他のイメージと相互作用をして、その結果起こりそうなことをイメージ的に実現してみせることができるのです。ただ、問題は夢の場合に典型的に表われてくるように、人間が想像を逞しくしてゆくとイメージが勝手に動き回って、とんでもないことになってしまふことがある点です。また、イメージが具体的な事象に限られているために非常に小さな世界のモデルしか作れないことも、このイメージ的な情報処理の持つもう一つの大きな欠点です。身の周りに年中起こるような事態に対しては、これでも間に合いますが、もっと大きな世界のモデルを作ることが非常に難しいわけです。

しかし、人間は記号を發明して、それをイメージに貼り付けることによって、経験の積み重ねだけでは作れないような大きなシステムを作ることができるようになりました。各々のイメージに名前を付け、それらを論理的な法則や因果法則によって縛り付けておくこと、今まで勝手に暴走が食い止められ、イメージが自分で変わっていつてしまうのを押えることができるわけです。人間は抽象的な安定した記号の組み上げによって、より大き

な世界モデルを構築することができるようになったのです。

それでは、人間は記号を發明したからといって、ダイナミック・スキーマを全然やめたのかというと、われわれの情報処理の本質的な部分は依然そういうイメージの世界にあると思われまふ。ところが、現在のコンピュータがやっているのは記号処理であり、言葉そのものはいくらでも入力することができても、イメージのようなアナログ的な性質を持ったものを入れることは大変難しいのです。それぞれの記号はイメージ的な感覚的内容を抜いてしまつたらほとんど空っぽになつてしまふにもかかわらず、今のコンピュータはこの部分ができないので、言わば内容の容れ物だけでできる処理をもつぱらやっているわけです。

人間と機械の共生

現在のコンピュータは、人間が論理法則や因果法則を使いながら、指示を与えなければ動きませんが、コンピュータがだんだんと進んでくると、人間がいちいち細かい指示をしなくても自動的に自分で考えてくれるようになり、人間は最終的なコントロールだけをすればよいことになるかも知れません。コンピュータの開発は、これからの方向に明確に意識されて進んでゆくだろうと思われまふ。今、人間とコンピュータのヒューマン・インターフェイスがしきりに言われているのも、両者がそれぞれのよいところを活かしな

がら協力してやってゆく人間と機械の共生が望まれているからです。人間の専門家の知識をコピーしてコンピュータ化した現在のエキスパート・システムのように、人間の知能の働きの一部分をなぞつたにすぎない「なぞり知能」ではなく、もっと人間的なコンピュータを作るためには、結局はコンピュータ自身がある価値観を持つようになる他はありません。より人間的な感性を持つコンピュータは、自分の行動に責任を持ったり、ある統一原理に基づいて自分で行動を選択することができなければなりません。このように考えてくると、勝手に自分で自分を進化させてゆくコンピュータの可能性もあるのではないのでしょうか。自分の行動を少し高いところから意識してモニターすることが出来るのは人間の優れた能力の一つですが、将来自分自身の概念を持ったソフト・ウェアができて、いろいろな状況に応じて、コンピュータが自分でプログラムを書くようになったら、ほとんど人間の感情を持ったことと同じになるでしょう。しかし、こうしてできた感情は人間のものと全く同じものである必要はありません。将来、人間とは非常に違った種類の機械感情が出てくる可能性もないわけではないと、私は思っています。

(文責・編集者)

* * *

第9回 大学院共同 セミナー

Ⅱ 主題Ⅱ

正義と無秩序

— 21世紀の法哲学への展望 —

期 日
'88. 7. 1 ~ 3

▼特別講演Ⅰ

法をどうみるか

— 相互主体的視座の確立をめざして —
京都大学法学部教授 田中成明氏

▼特別講演Ⅱ

法の拘束力とその起源

青山学院大学法学部教授 佐藤節子氏

▼講義と演習指導

Ⅰ. 現代社会契約論と正義

立教大学法学部教授 小林 公氏

Ⅱ. 自由 — 老子とホッブズ —

東京(9)、青山学院(8)、中央(5)、

慶応義塾・法政(各3)、明治(2)、国

際基督教・日本女子・武蔵・成城・早稲
田・一橋・学習院・上智・名古屋(各
1)、その他(5)、以上15校

◇

目立たない境界領域にある法哲学とい
う学問が、最近隣接領域である法学や哲
学の専攻者たちの注目を集めている。そ
れは戦後四〇年を経て、科学技術や経済
の急激な変化の中で、正義・自由・権

東京大学教養学部教授 長尾龍一氏

Ⅲ. 権利論

— 現代英語圏の議論を中心に —

一橋大学法学部講師 森村 進氏

Ⅳ. 法と哲学 — 法を作るのは理性では

なく、権威である —

名古屋大学法学部教授 森際康友氏

▼運営委員

長尾龍一氏

坂本百大氏

▼参加状況44名(内女子10名)

セミナー終了後に参加者から寄せられ
た感想・意見を紹介することで、そうし
た議論の一端をご推察いただけることと
思う。なお、紙幅の都合で残念ながら掲

参加者の感想から

契約論的正義論

— ブキヤナンとゴータイエ

“所有”観にふれて —

桜井 徹

一橋大学大学院法学部研究科博士課程

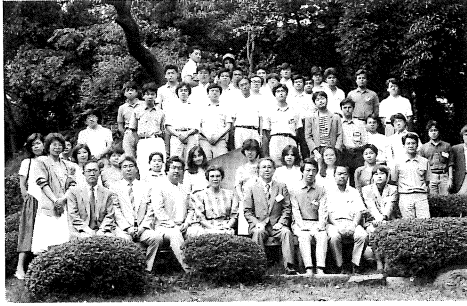
近年、契約論的正義論と呼ばれる立場
も、その内にかなり異質な諸見解を包摂し
ているらしい。小林公先生も推薦されて
いるらしい。ブキヤナン(Chicago)の
契約論的正義論における二冊の代表的著作、
ブキヤナン(J. M. Buchanan)の The Limits
of Liberty (Chicago, 1975) とゴータイエ(D.
Gauthier)の Morals by Agreement (Oxford,
1986)を一読して印象深かったのは、両者
の“所有”観の理解が全く対照的なこと
であった。正義論がその主たる任務として、財
のあるべき帰属と分配を追求し続けるかぎ
り、“所有”や“財産”という観念をいかに
把握するかは、その正義論の基本的性格を左
右する重要な要素であると思うからである。
ブキヤナンは、自然状態における紛争の結果
として達成される、財の“自然分配”が、
各人に帰属する財産権として規定されるに
は、(財の再分配がなされた上で)当事者相
互の“合意”が不可欠であるとの立場をとっ
ている。他方ゴータイエは、ロックの所有起
源論に依拠しつつ、自然状態において各個人
の労働により獲得された財は、“少なくとも
他者のために十分にかつたぶりと残されて
いる場合には”という但書きが遵守されて
いるかぎり、彼の排他的権利の対象物とな
している。したがって、ゴータイエのばあい、
人間相互間における“合意”は、“所有”の
前提条件としては必要ない。

このような両者の“所有”観の相違は、市
場の道徳的地位に関する見解にも反映されて

載できなかった力作もある。これらの
方々にもここで改めて感謝の意を表した
い。

いる。ブキヤナンによれば、かかる“合意”
は立憲契約として、諸個人の所有権を規定し、
相互の行動の自由を制約し、その結果、ある
種の“法”を生ぜしめる。それ故、このよう
な立憲契約を前提とする市場は、秩序あるア
ナキエと性格づけられる市場にせよ、高度に
道徳的な枠組であると言えよう。それに対し
ゴータイエにおいては、道徳は自由市場にお
ける効果最大化行動を制約するものとして現
われ出るのであり、“道徳的に自由な領域”
である市場が失敗するときに初めて、合理的
諸個人が“合意”によって道徳を生ぜしめる
とされるのである。

しかし、彼らの“財産”観のずれが一層大
きな意味をもつのは、自由な経済活動の結果
として生まれた“財産の不平等”に、彼らの
正義論が対処する姿であるように思われる
。均衡と最適の一致を達成する完全市場の
機能が高く評価するゴータイエは、市場での
自由競争から生じる不平等、あるいは当事者
相互が合理的に譲歩する“協力”の結果生じ
る不平等を、不公平として捉えることを拒絶
する。すなわち彼においては、市場と“協力”
がもたらす相互利益と物質的進歩は、貧富の
格差の拡大を補って余りあるものと考えられ
ているようにみえる。ブキヤナンの The
Limits of Liberty においても、財産の不平等
という問題は、必ずしも著者の関心の中心を
占めていたわけではない。彼もゴータイエと
同じように、市場の動きを尊重すべきことを
説く。しかしながら、ブキヤナンが、比較的
貧困な人々を“特定の立憲契約の下で集合
的に組織された共同体において、共通に保有さ
れている成員たる資格 (membership) に基
づいて、(比較的裕福な人々の経済的資産の)
何らかの分け前を間接的に要求し得る”
(Buchanan, op. cit., p. 73) ことを認めてい
る点に注目せねばならぬ。つまり、彼は、
各人の財産権の割当てを規定する“合意”に
参加した人々は、自由な経済活動の結果社会
的弱者とならざるを得なかったばあい、相互



ようこそ広場で——前左から長尾、田中、森脇、佐藤、坂本、森村、小林の諸氏

〈内面的自由〉をめぐる

東京大学法学部3年 牧原 出

「自由」という言葉は、古来数多くの思想家・実践家によって様々な意味内容を盛り込まれ、語られてきた。かかる「自由」概念を「内面的自由」に焦点をあてて整理を試みたものが、本セミナーにおける長尾先生の講義であった。

各人の財産権の根拠を、あくまでもパレート改善のために人々の「合意」に求めるブキャナンの「財産」観は、福祉国家的再配分政策の理論的正当化にあたって、ゴックの「労働による所有」理論を踏襲する、ロッキエの立場より、有益な示唆を含んでいると筆者は

考えている。というのも、財産権の境界を規定しているのは、労働を媒介とした人間と物との内面的関係ではなく、人間相互間に精神的効果を及ぼすのみ「合意」であると考えられる方が、福祉のための財の再配分をより容易に正当化できると思うからである。また、これらの二つの所有観が一方はロッキエによって、他方はグロティウスやブーフエンドルフに定式化されているという事実も、筆者には興味深い。

られてきた「政治的自由」、そして今回の講義の中核を占める「内面的自由」である。ここにおいては、プラトン、ホッパスから仏教老荘思想に至るまで数多くの「内面的自由」が語られており、それらを一括して論ずるのは決して容易ではないのだが、あえて若干の整理を試みてみたい。

「自由」とは、丸山真男流に言えば、「『である』自由」と「する』自由」の二局面がある。換言すれば、あらゆる行為を行なう可能性をはらんだ状態という意味での靜態的自由と、かかる「自由」を前提とした上で、ある種の価値を意欲的に指向するという意味での動態的自由となる。

ここで自由を阻害する因子としてもっとも問題とされたものが「欲望」であった。それは人間の行動の可能性を奪い、本来求めらるべき価値とは異なったベクトルへ向けて人間の行動を流しこんでいく。プラトンが「国家」で描いた現実の国制における人間像、精神分析学における無意識の研究、東洋哲学の言う「解脱」「無知無欲」もすべてかかる視点のもとに欲望の克服——内面的自由という図式のもとに位置づけられるものと言えよう。

しかるに、この図式の一方で近代市民社会は、功利主義哲学を基礎に、社会によって承認された価値を物質的利益となすことよって欲望を正面から肯定してきた。すなわち、物質的利益という価値へ向けて、欲望というエネルギーを絶えず注入することにより資本主義の自己増殖が「経済成長」の名の下に展開される。その結果生ずる様々な矛盾については今さら多言を要しないであろう。これに対し、我々は〈内面的自由〉の系譜を掲げる

ことで、資本主義原理の根本的な批判をなすことができる。ヴェーバーは、資本主義の世界秩序は「化石化した燃料の最後の一片が燃えつきるまで」存立するであろうと予測したが、むしろ前述の如くその根源的な燃料としての「欲望」を否定・克服すること、秩序そのものの克服によって肝要と思われるのである。

現代法哲学の有力な一潮流として、法システムの観点から法理論を構築する動きが見られるが、〈内面的自由〉の視点はかかる法理論への批判とも連なる。本セミナーでも、森脇先生が法哲学の実践的契機を強調する立場から既存の法システムの部分的・漸進的改良へ向けての行動原理の提供、政策への提言を主張されたのに対し、長尾先生は、日本の法システムが発展途上国の恒常的かつ構造的貧困を前提とした「欲望の体系」である点をとらえ、その部分的改良のにつき意義につき疑問を投げかけられた。これもまさに〈内面的自由〉の視点を背景とした批判といえよう。

むしろ両者の主張は各々説得力をもつ内容であったが、それをつきあわせてみることは、法哲学という学問領域の今後のあり方を考察することへとつながっていくように思える。



閉講式でコメントを述べる長尾龍一氏

主に国内法のレベルでとらえられてきたため、法システム論においても、その射程範囲は主権国家の枠内におさまりがちである。かかる議論が実践レベルにおいても漸進的一国改良主義にとどまるならば、現今の国際関係における資本を媒介とした支配従属関係を隠蔽するイデオロギーともなりえよう。政治・経済・文化といった様々の局面で国境の壁が低くなりつつある現在、国民国家の枠を越えた *Transnational* が法哲学において望まれるのではないだろうか。

しかし、かような視野を確保するためには、とりわけホッパス的自然状態モデルが適的な局面において、「法」そのものの内実を問題とせねばなるまい。およそ制度というものがある自覚的な表層から無自覚的・無意識的な深層に至るまでの層序を持つことを考えるならば、実定法という公的に認められた表層から慣習・本能的行動といった深みに至る層序の *Stratigraphy* が試みられねばならないのではない。

選択の時代を生きる

——バイオエシックスと正義——

明治大学大学院法学研究科修了 齋藤有紀子

私はバイオエシックスへの関心から今回のセミナーに参加した。現在、この領域では人間生命の始期に生じる倫理問題（たとえば生殖技術・障害新生児の治療）、また、人間生命の終期に生じる倫理問題（たとえば終末医療・臓器移植）などの具体的検討が重ねられており、その作業を通して技術と人間の関わり方、人間同士の関わり方、ひいては私達の文化のあり方までも問われ始めている。そして、そのことは科学的裏付けから説明できず曖昧な（いのち）つまり、その存在が不確かに曖昧な（いのち）というものを意味している。坂本百大先生は、私達の社会の前提となつて、「自由」と「自由意志」について、次のように一つの視点を提示された。即ち、「科学的にさかのぼれる自由意志は存在しない。

第144回 大学共同 セミナー

人工知能は 感性を持てるか？

Ⅱ 主題 Ⅱ

Ⅰ 全体講義 I

人工知能と感性

— 機械は感性を持てるか? —

中京大学文学部教授

戸田正直氏

Ⅱ 全体講義 II

芸術とコンピュータ

— 芸術と人工知能は両立するか? —

大阪学院大学教授

大村皓一氏

Ⅲ シンポジウム

I. 人工知能の可能性と限界

東京工業大学工学部教授 田中穂積氏

大阪大学工学部教授
大阪学院大学教授

Ⅳ 運営委員

坂本百大氏

川野 洋氏

田中穂積氏

Ⅴ 参加者 54名 (内女子 10名)

青山学院(9)、慶応義塾(6)、東京(4)、筑波・工学院・東京理科(各3)、千葉・多摩美術(各2)、東京工業・お茶の水

川野 洋氏

白井良明氏

大村皓一氏

高速演算や大量記憶を可能としただけではなく、「論理的推論」、「高度な認識」や「学習」といった人間の知能の働きに徐々に迫りつつあるのだ。

期 日
'88. 6. 18~19

このたびのセミナーでは、「AIの可能性と限界」を探ることを通して、最終的には「現代の精神的状況の文明論的課題」までもカバーすることを目的に、一泊二日の合宿討論を行なった。参加者からの「技術面だけでなく、哲学の領域にまで踏み込んだのがよかった」との感想にも示されるように、哲学、心理学、芸術、計算機の諸分野が一堂に会して、コンピュータと人間とを多面的に交錯させながら、活発な議論を展開した。このようなチャレンジングなテーマを設定し、セミナーを実現に導いた坂本百大氏をはじめ、指導教授各氏に対し、この紙面を借りて再度感謝の意を表しておきたい。

女子・一橋・東京都立・都留文科・聖心
女子・成蹊・東京女子・東洋・明治・立
教・早稲田・東京工業高等専門学校・東
京都立商科短期(各1)、その他(8)、
(以上22校)

中京大学文学部教授

戸田正直氏

聖心女子大学文学部助教授

往住彰文氏

Ⅲ. 人工知能—創造性と芸術—

東京都立科学技術大学工学部教授

数十年前までは、夢物語やSFの世界の存在でしかなかった「人工知能」(AI: Artificial Intelligence)は、今では高度に「人間臭い」領域にまで手を伸ばし始めている。現代の計算機システムは、

◇

一般にはAI研究は、専門家の知識と経験をコンピュータに蓄えさせ、利用する「エキスパート・システム」や「自動翻訳システム」のようにすでに実用可能な研究が主流を占めているが、戸田正直氏は、現在人間を相手に「ごく普通のおしゃべり」ができる「ねね」と呼ばれるコンピュータ・システムの開発を進めている。

氏は、開講後引き続き行なわれた全体講義Iで、氏にとって、コンピュータは極めて複雑なシステムである人間をより深く理解するための「非常に役に立つ

けれども、自由の意識は存在している。」というものである。では、科学的に裏付けをもたない各人の自由の「実感」を支えているものは何であるだろうか。

バイオエシックスを支える正義の一つに、医療の現場における「インフォームド・コンセントの法理」がある。これは、「十分な情報と説明を得たうえで、患者の自由意思による同意」というもので、その背景には、治療を受ける主体者である患者は、自分に施される治療について十分に知り、選びとる権利をもつ、という思想である。

ここで注目したいのは、この法理が「自由意思による同意」を実現するにあたって、本人に選択の機会を与えることをもってしていることである。その存在の不確かな「本人の自由意思」は、本人が迷う機会を与えられた上で選択したことであり、本人が「自分で選んだ」「自分で決定した」という実感を得られたことで確認されようとしている。ここに、現代社会を生きる私達の約束事の一つがみえてくる。それは「私達は「選択権」をもつということ」で、お互いが「自由」であるとも認め合っていきたいと思います。というものである。

もちろん「選択権」だけで自由を語り尽くせるわけではない。私達の社会には、能力——与えられた選択の自由の権利を行使する十分な能力——を備えていない人もいる。選択の権利は、そのような人達の「いのち」に対する誠実な配慮があつて初めて「自由」に行使されて然るべきだろう。

言い換えれば、私達と私達の社会は、その要素として、どれだけのものを抱え込みながら未来へ向かっていくのか、共にかけがえない「いのち」と認め合うために、どの技術を受容あるいは拒絶し、どのようなシステムを用意していくのか、その見極めの能力を問われ始めているのである。

現代社会の抱える問題は、様々な自由や権利の緊張関係から生じており、決してきれいなことでは解決しうるものではない。その中で、選択の自由を保障していくということは、個人の価値観の尊重(あるいは「偏重」)のようにみえて、実はそれにとどまらず、他人を含めた人間の尊重、そして「いのち」あるものを慈しむことにつながる可能性をもっているといえる。



左から往住、向井、大村、白井、戸田、坂本、川野、鈴木、田中の諸氏

道具」でしかないと指摘する。私たちの「常識」や「分かる」とはどういうことか」についての基礎研究を通して、言わば「人間を映す鏡」としてAIを用いようというわけである。氏は、人間の情報処理過程における「イメージ」の重要性を強調した独自の「ダイナミック・スキーマ」論を展開し、将来人間とコンピュータがそれぞれのいいところを活かしながら、協力していく「人間と機械の共生」の必要性を唱えた。

◇

I. 「現代のコンピュータは技術的には実際にとこまで進みつつあるのか」。
II. またそれに伴って「現代哲学の最前線では、今何が問われているのか?」。
III. 例えば、「コンピュータは、はたして芸術の源泉である創造性を持つことが

できるのだろうか?」。以下報告するよ
うに、今回のプログラムは、これらの問
題提起を中心に据えた三つのシンポジウ
ムを柱として進行した。

初日の夜に開催されたシンポジウムI
では、向井国昭、鈴木良次、田中穂積の
三氏によって、「現在のAI研究で何が
問題となっているのか」、「そもそもそ
こには原理的な限界があるのか」に焦点を
合わせた講義と討論が行なわれた。

人間がふだん使っている言葉(自然言
語)をコンピュータが理解する際に抱え
ている「文脈(コンテキスト)依存性の
問題」(向井氏)、人間の脳の出先機関と
しての手の運動に関する「技術習得の神
経回路モデル」(鈴木氏)などが紹介され、
従来のAI研究に対する種々の新しいア
プローチの例が、最新の成果を含めて聴
衆に披露された。「コンピュータに限界
はないのではないか」とその可能性の大
きさを強調した向井氏に対して、田中氏
は「現在のAIで最も問題となっている
のは、『学習』能力である」と指摘。私
たちが何の苦もなく使い分けている日本
語の助詞「は」と「が」の区別がコンピ
ュータにとっては大変難しいとの例を引き
ながら、「AIの研究をしていると人間の
すばらしさが際立ってくる」と話を締め
括った。

◇

計算機はプログラムされた通りに動く
のみで、「感性こそは機械には絶対に持
ち得ないものである」と普通には考えら

れている。コンピュータの働きは、人間
の「知的な作業」とは本来異質なものであ
り、人間の「心」のみが「感性」や「創造
性」を持つと信じられているからである。

第二日のシンポジウムIIで、このよう
な思い込みに対して挑戦を試みたのが、
坂本氏である。氏は独自の「心身論」に、
現代のAI研究によってもたらされた
様々な知見を結合させて、「心の哲学」
に新たな局面を切り拓こうとする。人間
の「自由意志」までも究極的には否定す
る徹底した「人間機械論」に立つて、氏
は「われわれが人間の心の働きだと信じ
ていたことが、着実に機械に置き換えら
れてきた」事実によって、近い将来に考
え方や言葉の使い方に「カテゴリー・
チェンジ」が起こり、これまでの「世界
観を根底から作り変えていくような第二
のデカルト革命が引き起こされる」可能
性を指摘した。

こうした坂本氏のややラディカルな主
張に承えて、往住彰文氏は「人工知能学
はもうひとつの心理学でもある」と位置
付けし、「記号の形で書くことのできる
ような知識で人間の心の仕組みを明らか
にする『計算機心理学』の有効性につ
いて語り、また、実際にAI開発に携わっ
ている戸田氏からは、単に人間の感情を
なぞらせたにすぎない「なぞり感性」(擬
似感情)ではなく、「統一性」と「価値
基準」を備えた本物の心を持った機械は
「当分できさそうもない」との見解が示
された。

私達の社会は、何をもって自由とするか、
という問いに対して、「選択の機会」という
一つの答えを用意した。次なる問いは、提示
された選択肢の中から、社会としては「何を
選びとっていいのか、というのだが、その
回答は未だ出ていない。(自由の実感)をも
つ私達は「何の実現のために私達の決定の
自由を用いるのか」を考えていくことによっ
て、前向きな答えが与えられるような気がし
ている。

◇

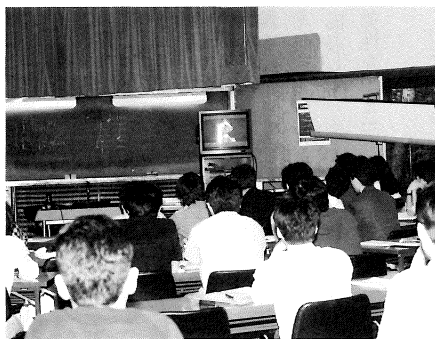
極彩色を放った「生物」がテレビ画面
を蠢く。その動きは精巧を極めている。

とてもリアルに感じると同時にその世界
は異様に「きれい」で、私たちの日常経
験とは何かしら異なった不思議な生命感
をたたえたイメージが展開している。コ
ンピュータと芸術の問題を論じる午後の
セッションは、わが国のCG(コンピ
ュータ・グラフィックス)界を代表するア
ーティスト・大村皓一氏による全体講義II
から開始された。もともと「アニメーショ
ン」とは「生命を吹き込むこと」を意味
するが、コンピュータによって人類は初
めて「言葉を実体とする魔法を手に入れ
た」と、氏は刺激的に主張する。氏によ
れば、CGシステムの本質とは、ある規
則に従って、文字の列(「言葉」)をキー
ボードに打ち込むと、コンピュータが計
算をして、絵が現われてくる点にある。
ちように優れた演奏家が、「音楽を表わ
す言葉」(「楽譜」)を楽器を用いて演奏
することにより、すばらしい「音楽」に
変換するように。コンピュータに入力さ
れる言葉は、一見「感性を欠いた」「無

味乾燥な論理的言葉である。しかし、「とても感動した」、「圧巻であった」との声に聞かれるように、VTRを用いて紹介されたCGアーティストの諸作品は、聴衆に氏の説く「冷たい言葉の奥深くに隠されていた力」の存在を気付かせ、一種の美的な経験を与えることよって、一同の心を魅了することとなった。

◇ CG芸術の現状を紹介した大村氏のビデオアルな講義を受け、セミナー最後のセッション・シンポジウムⅢでは、「コンピュータが創造性を獲得し、人工のレオナルド・ダ・ヴィンチになり得るかもしれない道」を模索し合った。

初めに、「コンピュータの眼」の研究を行なっている白井良明氏が、機械が描いた絵の実物を示しながらコンピュータによる画像イメージ処理の実際を説明する。光の明暗を感じてものの輪郭を描



コンピュータ・グラフィックスの作品を觀賞する

いてゆくコンピュータが、人の似顔絵を描くと「皺だらけになってしまふ」ので、サッチャー首相の時は「事前に皺の数が少なくなるように調整しておいた」というユーモラスな裏話も紹介された。コンピュータ・ビジョンの現状に続いて、川野洋氏は「コンピュータが作る映像は果たしてクリエイティブか」と問題提起。

自身「コンピュータと芸術の間を行ったり来たりしている」と言う美学出身の氏は、「芸術的表現には必ずルールからの逸脱がある」と「創造性」の概念を規定し、ある規則を与えられて自動的に作品を作り上げる「自己生成型」の計算機ではなく、「外から入る様々な経験を基にして自分で『学習』する」主体性のあるコンピュータこそが真の創造性を持つと主張した。フロアを交えた質疑応答では、人間の芸術活動と深い関係のある「非合理とも言える直感」や「プログラム自身が自分を『反省』する機能」を持ったコンピュータの可能性を巡って、講師も交えて熱のこもった論戦が繰り広げられた。

◇ AIの可能性については、「人間と同等」か「かなり近い線」までは到達できると見る研究者が多いという。今回は一泊二日の短期セミナーであったこともあって、参加者からは「情報量が多くて処理仕切れなかった」との感想も聞かれたが、近未来、人間に様々な影響を与えるであろうコンピュータの可能性とそれははらむ問題について、現時点で語り

合ったことの意味は大きい。

参加者の応募理由に「人間の最も微妙な部分の一つである感性がそうやすやすと機械のごときに備わるかという生身の人間ひいきの場にありながら、人間自身もが圧迫され出すのではないかという一抹の不安を抱くAIの話の聞きたい」とあったが、確かに「人間が生み出したものが、すべて人間を幸福にするわけでは

参加学生の感想から

ミネルバの鼻が羽ばたきを始める頃

——コンピュータが夢を見るとき——

千葉大学工学部電子工学科3年 酒井 純

私は、数年前から実用化されているエキスパート・システムには、夢を感じられず、また「人工知能(AI)」「エキスパート・システム」という論議に興味を抱いていました。この論議は、私はユング心理学に興味があり、人間の思考の背後には感情があって、思考のみではAIはなし得ないと考えているからです。今回のセミナーは、まさに私が日頃から求めていたものでした。

当初私は、参加者は私のような工学部の人間がほとんどだと予想していたのですが、実際は工学系だけでなく、哲学、心理、経営、商学、教育、文学、美学と多岐にわたって、講師の先生方も、哲学をはじめ、第五世代コンピュータ開発機構の方まで、それぞれ分野で最先端の研究をなさっていらっしゃる方が来て下さいました。

今まさに、時代の流れがAIの開発を要求しているのです。それぞれの学問の研究分野の壁を超えて、理系・文系の保守的な枠を破り、世紀末に向けて人間の永遠の課題である

「心」の解明を完成するために、「AIジャーナル」の第一号でこのことを「ミネルバの鼻は日暮れになって羽ばたき始める。」とヘーゲルの言葉で表現していました。そして、講義やシンポジウムも、「AIとは何か」とか「カテゴリー・チェンジ」など根本的な問題から、「状況意味論」や「多層神経回路網の制御への応用」と広範に渡り、内容が充実していったのみならず、その後の議論が大学では始り得ない程に白熱しました。時間が終わっても大抵の参加者が残り、先生との議論を朝の二時まで続け、私は数人と、夜明けまで、日頃の大学教育で満たされたい何かを求めてやってきました。私はふと、初対面の人と何のこだわりもなく話し合っている自分に気づくのでした。そして、日頃は誰とも話せなかった、心やAIに関する私の考えを話し議論することで、ここ数年の欲求不満を二日で解消したような次第です。

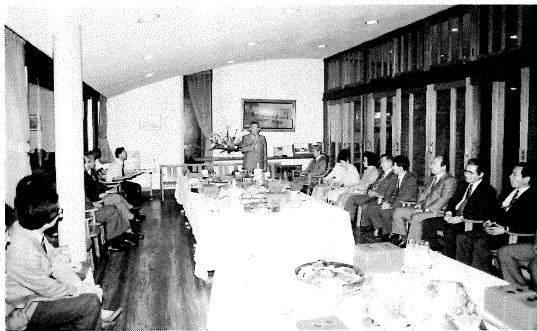
このように、充実した講義や、徹底的な議論によって、自分の不勉強を再認識し、また、以前より幾分か自分の考えに自信が持てた気がします。私は、AIに関するセミナーが再度開かれることを希望します。そして、今回のセミナーの結論はもちろん「AIは感性を持てる」で、私は逆に、本質的な意味において、「感性なしにはAIを完成できない」と考えます。

大学セミナー・ハウスの皆さん、遅くまで議論につき合ってくれた先生方、本当にありがとうございました。

排水処理施設完成披露パーティー

88年7月20日／交友館

宿泊施設にとって排水処理は言うまでもなく給水と並ぶ「要塞」である。二〇数年前は当ハウスの一带は、旧由木村の人家のほかは杉と雑木の林が所々に生育しているなどらかな丘陵地であった。開館当時の浄化槽は単独処理槽で浄化された排水が一カ所に集められ、更に土壤浄化によって処理されるしくみであった。今日、都市化・宅地化とともに総合的な排水処理施設の建設が要求されている。



創立当初の思い出を語る地元代表・市議員石井栄治氏
(交友館)



完成した浄化槽を視察する

当ハウスにとって長年の懸案であった合併処理槽の建設が、5月23日、ようやく着工の運びとなり、6月30日に完成し、7月1日から使用が開始された。これによって水質BOD10ppm以下で放流が可能となり、地元の人々の不安も解消される。

*

7月20日午後6時より地元の人々をお招きし、工事関係者、職員など総勢40名が参加して、完成祝いの会が行なわれた。パーティーに先立ち、工事を担当した協和電設から、設置された浄化槽の機器や処理方法についての説明が現地（国際セミナー館の下方、テニスコート東側）で

行なわれた。因みに完成した合併処理槽は四〇〇人槽で一日の汚水処理量は八〇トンである。

開宴に当って、まず中川理事長がこれまでの地元の理解と協力に謝意を述べ、工事担当者の労をねぎらわれた。つづいて地元を代表して、開館当時、由木村の村長で現市議員の石井栄治氏が創立者飯田宗一郎氏（現名誉館長）との出会いを語り、「地元が誇る日本のセミナーハウス」と地元との友好関係が再び築かれることを希望しているとの挨拶をされた。

なお、国際セミナー館に増設されな

第69回理事会・第49回評議員会

88年8月26日／学士会館

〔出席者〕

（理事） 中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、鈴木皇、柏木茂、委任状による者14名

（評議員） 喜多勲、岡宏子、中村哲、加納六郎、中山政夫、安田元久、柳井久義（代理）、石田博、井早康正、宇野重昭、委任状による者172名（敬称略）

◇

中川理事長が議長となり議事に入った。次の案件について柏木専務理事より説明が行なわれ、質疑応答ののち、承認された。

- ▽遠来荘隣接窪地の盛土に関する件
深さ9メートルの窪地となっている遠来荘北側の隣接地に対して、地元の土木業者から盛土の依頼があり、緑地帯を造成・維持することを条件に承諾する。
なお、関連して以下の意見が出された。
記念植樹の配置を含めて、ハウスの環境を計画的に整備することが必要となっており、専門家の意見を聞きながら、調査を行なうべきであろう。
- ▽報告事項
- (1) 開館20周年記念館の建設について
- (2) 排水処理施設について
- (3) 構内の赤道について
- (4) 貸金体系的の運用基準案について
- (5) その他

昭和63年度

第1回大学教員懇談会企画委員会

88年5月12日/青学会館

〔出席者〕 蠟山道雄、絹川正吉、石川孝夫、示村悦二郎、杉山恭、原科幸彦、美濃口武雄、坂井昭宏、中島利誠、平出彦仁、前沢三郎、中田良平、塚田紘一、奥山忠信、高倉翔、福田一郎、軍司敏博、大谷瑞郎、土方直史 (敬称略)

◇ 新規(昭和63・64年度)委員会は新たに16名の委員を迎え、26名(国立9、私立17)の陣容で運営されることになった(委員名簿は別掲)。

第1回委員会は新任委員の歓迎に加え、発足準備委員会当時から9年に亘って委員長をつとめられ、このたび退任された井早康正氏(電気通信大学教授)の歓送の意味もこめた晩さん会を是年で、以下の議事がはかられた。

〈主な議事〉

(1)正副委員長の選出

委員長には、前期委員会の正副委員長から推せんのある蠟山道雄氏が全員の賛成を得て選出され、副委員長には新委員長長の推せんを受けて示村悦二郎、原科幸彦両氏が就任した。

(2)大学教員懇談会記録書編纂委員会の報告

(3)第24回大学教員懇談会の実施報告

(4)第25回大学教員懇談会の企画

昨年度実施した第24回懇談会の成果を踏まえて活発な意見の交換がなされた。「学生にとっての大学の魅力とは何かを

探るためには、懇談会に学生も参加させて意見を聞いてみてはどうか」「日本の大学では余りにも授業改善の努力が不足している」「個別的な授業の改善方法を聞くのでは、懇談会の魅力開発につながるのではないのか」などの議論の後、テーマを「統・大学の魅力開発」とし、内容については更に企画会議で検討することにし、蠟山、示村、原科、宮腰、石川、杉山、坂井、中田、福田、土方の10氏をメンバーに選出した。

昭和63・64年度大学教員懇談会企画委員会 (就任順、敬称略、○印は新任)

〈委員長〉

蠟山道雄 上智大教授(国際政治学)

〈副委員長〉

示村悦二郎 早稲田大教授(制御工学)

原科幸彦

東京工業大助教授(居住環境計画)

〈委員〉

小池生夫

慶応義塾大教授(応用言語学)

絹川正吉 国際基督教大教授(数学)

宮腰 賢 東京学芸大教授(国語学)

石川孝夫 東京理科大教授(物理教育)

神保信一

明治学院大教授(教育心理学)

杉山 恭

青山学院大教授(国際関係論)

平木典子 立教大教授(心理臨床)

○美濃口武雄 一橋大教授(経済学史)

○坂井昭宏 千葉大教授(西洋哲学)

○三沢佳子 日本女子大教授(英文学)

○中島利誠

お茶の水女子大教授(被服科学)

○平出彦仁 横浜国立大教授(心理学)

○前沢三郎 成蹊大教授(熱工学)

○中田良平 電気通信大教授(電子工学)

○塚田紘一 明星大教授(教育心理学)

○奥山忠信 埼玉大教授(理論経済学)

○高倉翔 筑波大教授(教育行政学)

○福田一郎 東京女子大教授(遺伝学)

○岡村 浩 工学院大教授(物理学)

○軍司敏博 大妻女子大教授(繊維)

○大谷瑞郎 武蔵大教授(西洋経済史)

○土方直史 中央大教授(社会思想史)

○星谷 勝 武蔵工業大教授(応用力学)

昭和63年度

第1回国際プログラム委員会

88年5月18日/私学会館

〔出席者〕 三輪公忠、菊地靖、立川明、宇佐美滋、小野沢正喜、竹田いさみ、草場宗春、今井圭子、J・ウェルフィール、川成洋、西野文雄 (敬称略)

第1回委員会は別記11名の委員に、ハ

ウス側から中川館長、柏木専務理事、企画室スタッフ3名が出席して開催された。

新規(昭和63・64年度)委員会は6名の新任委員を迎え、19名の陣容でスタートすることになった(委員名簿は別掲)。

〈主な議事〉

(1)委員長の委嘱と副委員長の指名

中川館長は委員長に三輪公忠氏を委嘱し、同氏は菊地靖、宇佐美滋両氏を副委員長に指名、それぞれ全員の賛成を得て承認された。三輪氏は昭和54年から副委員長をつとめてこられた、いわば国際プログラムの育ての親の一人である。前期委員長・広野良吉氏の後をうけて新副委員長とともに今後二年間の運営を担われる。

(2)第14回国際学生セミナー「君は「Japan Problem」をどう考えるか」の実施報告

(3)第15回国際学生セミナーの企画について

共通テーマ「開かれた」日本・総点検の三回目となる第15回セミナーは、日本が直面している課題に焦点を絞り、日本の海外援助、外国人労働者の問題を取り上げる方向で内容を検討することとし、運営委員5名を選出した。

昭和63・64年度国際プログラム委員

(就任順、敬称略、○印は新任)

〈委員長〉

三輪公忠 上智大教授(国際関係史)

△副委員長▽

菊地 靖 早稲田大教授(社会人類学)
宇佐美滋 東京外国語大教授(国際関係論)

△委員▽

熊田禎宜 東京工業大教授(都市計画)
立川 明 国際基督教大準教授(教育史)

渡辺昭夫 東京大教授(国際関係論)
溝田 勉 国連児童基金駐日代表部副代表

小野沢正喜 筑波大助教授(文化人類学)
竹田いさみ 独協大助教授(国際政治学)

昭和63年度

第1回共同セミナー委員会

88年6月9日/私学会館

〔出席者〕小田晋、小浪充、江沢洋、栗原彬、室田武、川端香男里、坂本百大、袖井孝子、佐藤敬三、猪口孝、草津攻、田中克彦、西村圭子 (敬称略)

第1回委員会は別記13名に、ハウス側から中川館長、飯田名誉館長、柏木専務理事、企画室スタッフ3名が出席して開催された。

本年度委員会は6名の新任委員を迎え、25名の陣容でスタートすることになった(委員名簿は別掲)。

深海博明

慶応義塾大教授(国際経済学)
上田 孝 国際交流基金受入課長
三村満夫 文部省留学生課長
草場宗春 日本学術振興会事業部長

○今井圭子 上智大助教授(開発経済論)
○ジョン・ウェルフィールド 国際大準教授(歴史、国際関係論)

○川成 洋 法政大教授(英文学)
○鈴木典比古 国際基督教大準教授(国際経済学)

○添谷芳秀 慶応義塾大講師(国際政治学)
○西野文雄 東京大教授(土木工学)

△主な議事▽

(1)委員長の選出

前年度に引き続き竹内啓氏を委員長に選出。副委員長の指名は同氏欠席のため、次回まで見送られた。

(2)昭和62年度プログラムについて

第143回大学共同セミナー「よくわかる家族のはなし」の実施報告及び昭和62年度教育プログラムの総括

(3)今年度プログラムについて

年度前半のプログラムの準備状況と後半の企画について

(4)協議

来年度の企画について、次のようなテーマ案が出された。

○大学院共同セミナー「狂気論」
○大学共同セミナー「世紀末とは何か」

また、これまでも何度か議論に上った共同セミナーの単位認定の問題について意見交換を行なった。

昭和63年度共同セミナー委員

(就任順、敬称略、○印は新任)

小田 晋 筑波大教授(精神衛生学)
小浪 充 東京外国語大教授(アメリカ研究)

江沢 洋 学習院大教授(理論物理学)
池上嘉彦 東京大教授(言語学)

栗原 彬 立教大教授(政治社会学)
竹内 啓 東京大教授(統計学)

室田 武 一橋大教授(計量経済学)
合田周平 電気通信大教授(システム工学)

川端香男里 東京大教授(ロシア文学)
坂本百大 青山学院大教授(哲学)

中野 収 法政大教授(コミュニケーション論)
坂部 恵 東京大教授(哲学)

桜井哲夫 東京経済大助教授(理論社会学)
袖井孝子 お茶の水女子大助教授(家族関係学)

小川捷之 横浜国立大教授(臨床心理学)
佐藤敬三 埼玉大教授(科学論)

○草津 攻 津田塾大助教授(社会心理学)
○陣内秀信 法政大助教授(イタリア建築史)

○田中克彦 一橋大教授(社会言語学)
○西村圭子 日本女子大教授(日本史学)

開館20周年記念募金第九回報告

——記念館建設のために—— (88年8月末日現在)

申込総額 一四四、二六八、〇〇〇円

内訳 財界関係 七八件 一三三、六二〇、〇〇〇円

大学 三五件 四、四六〇、〇〇〇円

一般 三二件 一、一九〇、〇〇〇円

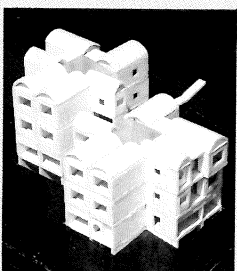
個人 二六四件 四、九九八、〇〇〇円

◎一般 三〇、〇〇〇円 大学英语教育学会殿

◎個人 一〇〇、〇〇〇円 東京理科大学教授沖塩莊一郎殿

二〇、〇〇〇円 青山学院大学教授佐藤節子殿

三〇、〇〇〇円 英語教育協議会清水護殿



記念館の模型 (設計・U研究室)

千人会

'88年6月〜8月

◇現在会員一、五〇八名(実会員数)
(通算入会者一、八〇三名)

◇新しく会員となられた方々
C 八千代国際大学講師 山口 桂子殿

◇会員ありがとうございます
福田雄、石井修二、児玉昭太郎、板倉譲治、川名明、朝野洋一、野沢浩、小島守生、柳田博明、碓井信一、藤井耕一、村田喜代治、高田淳子、徳末愛子、竹内喜夫、扇谷尚、和田英一、柴田恭二、柴田勇造、佐藤進、江沢洋、松井源吾、古畑和孝、芳野起夫、竹内喜代司、安宅光雄、福山直美、今堀和友、原田富士雄、望月継治、上野芳夫、中山昌、小倉充夫、藤野登、嶺哲之助、北野美枝子、見田昭次、中村幸安、岡田正弘、佐藤美喜子、清水昭次、大内力、長清子、太田秀通、島海俊宏、西川治、猪瀬尚志、森森健、鈴木千歳、白井久和、栗林恒雄、中野スミ子、末武国弘、林泰造、川田侃、金子晃、秀村欣二、吉松藤子、佐藤弦、常行敏夫、詫摩武俊、阿部斉、長谷川幸男、相澤忠一、林俊一、柴田政利、土田美芳、長尾龍一、都留春夫、井早康正、名東孝二、二谷貞夫、入江和生、黒田道雄、石田雄、石井進、光延明洋、立川明、川田雄一、熊田陽一郎、三橋文雄、讃岐和家、橋谷卓成、大野泰雄、佐久間まゆみ、岡沢憲美、中村哲哉、谷下市松、中川一郎、和田義信、金谷憲、太田善磨、長浜洋一、小川正浩、千住鎮雄、中村進、中村登志哉、合田周平、綿引二郎、村瀬勇雄、田島恵児、慶谷伸代、小池滋、藤原鎮男、藤原重雄、古賀正則、中村浩三、松島恵、篠沢秀夫、小川信子、山西貞、鈴木松、柏木恵子、児玉久雄、増田茂樹、梅沢豊、三輪公忠、橋本智、鈴木成文、品川孝次、窪田成俊、窪本智、鈴木成文、品川孝次、窪田富男、朝日信夫、西村敏男、山井薄、吉田美穂子、三宅彰、三和治、大熊徹、山本茂、辻達也、芥川龍男、角瀬保雄、橋本研一、宮本

瑞夫、小池生夫、五十嵐武士、宮川俊彦、有末賢、川島須美子、石坂巖、松平文朗、川原啓美、原誠、奥田夏子、松瀬貴規、稲田拓、中山光雄、篠崎啓助、永井裕、柳下勇、石川馨、平出彦仁、山田哲也、大吉芳彦、大畑篤四郎、原島幸太郎、菅谷芳雄、大蔵隆雄、十代田知三、菊池雄二、鹿島健次、小島蓉子、原田行男、小林祐子、田中弥寿雄、船山信子、伊藤清子、田村恭、小西悟、阿久津喜弘、長内了、早弓博、松村信治郎、岡村文子、宮野三郎、若槻泰雄、高村象平、中川重雄、井上孝、山本武彦、渡辺昭夫、寺川国秀、浅井邦二、村松暎、岡本剛、市川博、福島正久、福山仙樹、五十嵐香、八幡義博、藤田淑子、小沢重男、白濱謙一、伊藤一郎、荻原洋太郎、喜多勲 (敬称略)

◇千人会員からのたより
カードありがとうございます。この夏、寓居が完成しますので、その折に「セミナーハウス・ニュース」を整理し、ファイルして書棚に飾りたいと思っております。

私の誕生への祝詞ありがとうございます。馬齢ながら七十七歳の長命を迎えることができ、貴ハウスのご事業に貧者の一灯の寄付ができましたことを光榮に存じます。 明治大学名誉教授 藤井耕一

四月には新緑の中、久々にゼミ合宿で利用させて頂き、厚く御礼申し上げます。 中央大学教授 原田富士雄

今年もお蔭様で誕生日を迎えました。千人会初回からのメンバーです。ニュース等楽しみにしています。 目白学園短期大学元教授 中山 昌

広島大学を最後に退官いたしました。今誕生日カードを頂き、第二の人生に向けて飛躍する力を得ました。有難うございます。 前広島大学学生部次長 嶺哲之助

満八十八歳になりました。 日本学士院会員 岡田正弘

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

報寄付金

'88年6月〜8月

◇無沙汰していますが、着実なご前進を祈り上げます。昨年七月一日、左記の職務に選任されました。今後ともよろしく。 東洋英和女学院短期大学長 禿村欣二

梅雨空に緑濃さますます丘の上 若人待つくさびの含は 杏林大学教授 相澤忠一

この夏も合宿でお世話になります。 筑波大学助教授 佐久間まゆみ

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円



日本友和会の早天礼拝
——韓国の神学者をゲスト
に迎えて(88.7.30)

八王子市役所職員伊藤功殿

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

◇ 〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円
五、〇〇〇円
五、〇〇〇円
一〇、〇〇〇円

業／務／通／信

88年6・7・8月

夏の多彩な合宿研修から

この夏の異常気象は地球規模とか——八王子でも記録的な「夏らしくない夏」であった。が、セミナーの丘の夏には異変はなく、今年も、夏の休暇を利用して熱心に研修を行う、国内外のおおぜいの人びとで賑わった。以下、個別大学の合宿以外の今夏のトピックスを拾ってみる。

●久々の再来を迎える

「大学英語来らずして、夏は来ず」という格言がある。67年（開館後二年）以来毎夏の開催で、「ハウスとともに発展してきた」と言われる大学英語教育学会（JAEC）の夏期セミナーのことがある。そのセミナーが、二年連続海外での開催の後、三年ぶりにこの丘に戻って来られた。「夏らしい夏」の再来なのである。英米から招かれた講師と全国からの英語教員計69名が終始英語で五泊された。そのおひとり、湯本和子先生（青山学院大講師）にとっては21年ぶりのハウス再訪であった。当時一学生としてこの丘での日米学生会議に参加して得た「異文化体験」と今回のセミナーとの二つの夏を重ね合わせた時の「感慨」を一文に収めてお寄せいただいた（下掲）。

計測自動制御学会の制御理論シンポジ

ウムはハウスでの開催が通算八回目となるが今回は全国各地を巡った後の、久々七年ぶりの再来であった。大学教師、院生、企業人（最大で112名）が三泊され、二日の発表、特別講演、懇親パーティーなどを行った。この種の学会が都心型の簡便な施設を指向する中で、ハウスが再び会場として選ばれたのは、この丘の自然と精神的環境に変わぬ心をお寄せ下さる示村悦二郎・早大教授に負うところが大きい。大部分若者向けに作られている宿舎は、たしかに年輩の方々には不便と感じられるであろう。来年は関西での開催。そして二年後、ハウスは間もなく着工となる新館（開館20周年記念館）を加えて同学会を迎えることになるだろう。

●国際的な諸集會——「お米シンポ」など

今年で九回目となる日豪合同セミナーは五年ぶりの復活であった。近年のオーストラリアへの関心の高まりを反映して、日帰りを含め過去最多の300名が各界各層から参集、「オーストラリアと私——新しい交流を求めて」をテーマにG・ミラー駐日大使の講演、分科会討論恒例のオーストラリア・ワイン・パーティー（15頁に写真）などで日豪の「民間交流」を深めた。

日韓学生会議は両国の「学生の、学生による、学生のための会議」をモットーに85年に発足、日本側にはハウスの協力会員校となっている大学の学生が多い。すでに両国で一回ずつ実施されている

大学セミナー・ハウス再訪

大学英語教育学会

セミナーに参加して——

青山学院大学講師 湯本和子

このたび第22回J A C E T 夏期セミナーに参加する機会を得、久方ぶりに知的興奮を呼び込まされた自分を感じたことでした。セミナー・ハウスのモットーにふさわしい、真に「*Three English*」な充実した六日間で、私は忘れ得ぬ夏になりました。

私が初めて当ハウスを訪れたのは、今を去ること二十一年前、第22回日米学生会議の折のことでした。木立の間に散在するユニット・ハウスに日米の学生がべアアで起居を共にし、五つの分科会に分れて討論した一週間でした。米国の学生達の立論の鋭さ、その説得力に強烈な印象を受けましたが、その経験は、一年後米国における大学院生活のよいオリエンテーションとなったことでした。異文



このたび第22回J A C E T 夏期セミナーに参加する機会を得、久方ぶりに知的興奮を呼び込まされた自分を感じたことでした。セミナー・ハウスのモットーにふさわしい、真に「Three English」な充実した六日間で、私は忘れ得ぬ夏になりました。

化間コミュニケーションの経験は驚きでもあり喜びでもありましたが、それ以上に、全国から選ばれた学生（特に文学部以外の学部の学生達）の語学力の確かさに驚嘆し、自らの井戸の中のかぶり方を知らされたものでした。

当時そのままの本館のたたずまいと食堂からの森の緑「*Parish & Vine*」方式のJ A C E T のセミナーは、酷暑の中で白熱した議論を交した青春の日々と重なり合い、一種不思議な思いにとらわれたことでした。当ハウスで過した二つの夏の間に存在した長い時の流れが一瞬にして消え、あたかもタイムカプセルに乗って二十一年前に戻されたような感覚にとらわれたのです。

日米学生会議に出席し、「文化」分科会に参加しようと思ったのは、言語と文化とのかわりあいへの興味からであったのですが、思えばそれが、その後米国の大学院で言語学を専攻し、ひいては文化人類学の翻訳学を手がけるに至った現在へと目に見えない糸で結ばれていたのです。

このようにセミナー・ハウスは私のささやかな知的生活のいわばスタート・ラインであり、その後の活動の源泉であったのです。そのことをこの度滞在して改めて感じ、感慨深いものがありました。この次訪れる時には、セミナー・ハウスはどんな顔を見せてくれるか、今から楽しみにしております。

を含め最大で500名近い参加者で溢れた。

国外からの参加はタイ、韓国、フィリピン、アメリカなど六カ国の26名で、冒頭ではタイ村落問題自治推進プロジェクト研究員のポンピライ・ラートウィチャーさんが、「国際的米流通の現状と問題点」と題して講演した（15頁に写真）。実行委員の西川潤・早大教授をはじめ、推進者、支援者にはハウス関係者も多く、また、地球規模での生態環境の保全にも等しく強い関心をいだく国内外の参加者か

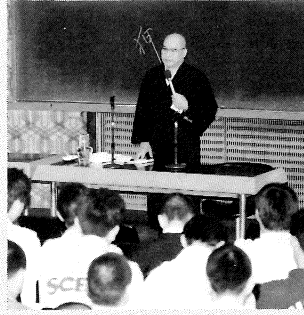
（次頁4段目につづく）

青春の色と丘

駒沢大学仏教学部

新入生オリエンテーション

駒沢大学仏教学部教授 鈴木格禪



駒沢大学仏教学部は、禅学科と仏教学科との二つに分れるが、毎年、学部全体で二百人程の学生が、狭き門をくぐって来る。仏教学部といえは、宗門関係の子弟とばかり思われがちであるが、近年は一般家庭の子女の入学志願者が、僧籍にある者の数を圧倒する。

新入生にとって四月は、気持の不安定な時期である。右をみても左をみても知らない人ばかり、それに、地方から初めて上京してきた者は、東京という得体的にしない大都会が、不断に醸し出す複雑な空気に、急にはなじめない。

それに、学内で実施されるオリエンテーションだけでは、何か肝心なものゝの欠落がある。それを補うためにはどうし

たらよいか。それは直接学生諸君に接する立場にある者の、切実な、そして、

かなりに喫緊な悩みであり関心事のひとつであった。そんなことから、わが学部がセミナー・ハウスの利用を

思いたち、そのお世話になり始めてから、今年

で四年目である。

毎回、病氣や特別の事情がない限り、先生方をも含めて、その出席率は百パーセントに近い。

セミナー・ハウスには、全体として、実にこまかいところまで、行き届いた気配りがなされていて、ここを管理し運営して下さる方々の、心のあたかさや優しさが、直に伝ってくるようである。

ここには風雅な山荘の趣きがある。教師館の屋上に立つと、山並の向うに富士山が見える。本学部が利用するとき

は、いつも花の盛りである。満開の桜と

淡い緑が自然の風光を綾に織りなして、

学生諸君の都での、新しい船出に調和する。セミナー・ハウスの春は、まさに青春の色に彩られた人間の丘である。

はじめ、少なからず緊張気味でヨソヨ

新入生オリエンテーション実施状況

昭和63年6・7月

学校名	参加者数(人)
● 6月	
白梅学園短大・保育科 Aグループ	*154 (12)
白梅学園短大・保育科 Bグループ	*156 (14)
東京薬科大・薬学部 A・Bクラス	153 (3) <4>
早稲田大・建築学科	224 (9) <28>
東京学芸大・学校教育学科	46 (4)
東京薬科大・薬学部 E・Fクラス	165 (2) <12>
東京学芸大・英語学科	22 (3)
● 7月	
お茶の水女子大・文教育学部 (11学科)	261 (23)
お茶の水女子大・理・家政学部 (8学科)	285 (24)
計 9グループ (5校)	1,466 (94) <44>

(注) 参加者数の()内は教職員、< >内は上級生とともに内数。
*は2泊。他は1泊。実施順。参加者の延人数は1,770(115)<44>

昭和63年度(4~9月)の集計

計 62グループ(33校)	実人数 8,598 (700) <814>
	延人数 9,538 (746) <918>

らは、自然と調和したハウスの存在を高く評価する声が聞かれた。

なお、訪日研修グループでは、常連の産業能率大「海外学生訪日研修団」(米国5大学・10カ国・38名)が日本研究で九泊した。また、ライフ・ミニストリーズ(夏季休暇中、日本各地の教会等で英会話教授などの奉仕活動に従事したアメリカ人学生ら150名)も来日直後のオリエンテーションと離日前の反省・総括の二回にわたって滞在した。特に6月中旬には、右記二グループの合宿が重なったので、ハウスは米国からの若者たち約200名で溢れた。

ソしかった人の心が、一夜の共同生活ですっかり解きほぐされ、ここかしこに親しげな交友の輪ができる。それは先生方の懸命な努力によることもさりながら、セミナー・ハウス自身のもつ精神と環境の良さも預って力がある。

若い時の鮮烈な印象は、生涯を通して生きつづける。セミナー・ハウスが、生涯を通して生きつづける師や友人との、すぐれた出逢いの場所であることを、私

はいつも希っている。

セミナー・ハウスよ永遠なれ。

● 新入生の感想

大学セミナー・ハウスは想像していたよりもすばらしかった。大自然に囲まれていても東京とは思えない。特にこの季節は桜が満開で一面に花びらが散っていてとても美しかった。一泊という短い期間だったが、同

学

科のしかも初対面の友人ができたことは私に

(仏教学科 小野公子)

八王子の町から、余り離れていない所に、うっそうとした林とセミナー・ハウスのシンボルである建物が、バスの車中からほんの少し見えたように思います。まだ友人が出来ていない不安を、セミナー・ハウスが見事に解消してくれました。初めはやや殺風景に映った食堂が、楽しい語らひの場になりました。また、二人部屋のハウスの中で、顔を合わせているうちに、打ち解けてきた。夜の十二時を過ぎたことも気付かない程でした。

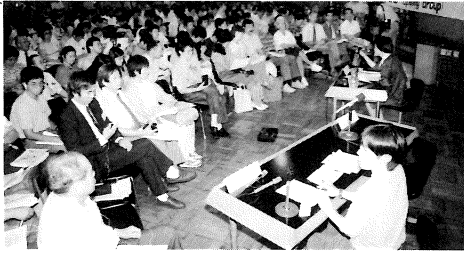
それと同時に、ハウスの鍵の自己管理や、その他のルール等は、これからの大学生活を示唆しての参考になったことも事実です。

僕は、今から始まる四年間の抱負と共に、またいつの日か、このセミナー・ハウスに来ることを願ひながら、帰路についています。

(禅学科 土肥和政)

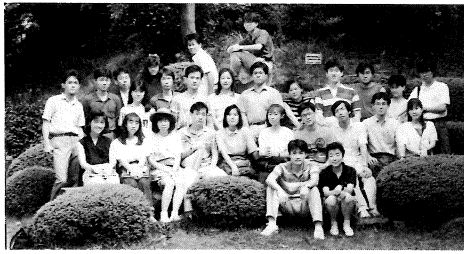
利用状況

＊Ⅱ 同月2回利用
＊Ⅲ 同月3回利用
日帰りを除く



国際お米シンポジウム——食糧自立を考える——
手作りの国際会議の会場は熱気にあふれて ('88.8.26)

■6月(65グループ、延四、四七二人)
東京都立大学教授 大村 芳正
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーション・セミナー*
東京都立大学教授 森岡 清志
武蔵大学講師 大西 昌子
駒沢大学助教授 片桐 伸夫
東海大学助教授 綾野 克俊
明星大学HPM研究会
明治大学教授 長谷川昭彦
駒沢大学助教授 谷敷 正光
東京薬科大学フレッシュユマン・セミナー*
日本大学教授 原田 行男
早稲田大学建築学科新入生オリエンテーション
慶応義塾大学教授 伊藤 喜栄
千葉商科大学教授 菅沼 憲治
明治学院大学教授 宮野 彬



日韓学生会議——「国際社会の中の日韓両国」
をテーマに ('88.8.7)

東京学芸大学教育学科新入生研修
青山学院大学教授 長谷川浩一
東京理科大学教授 沖猛 一郎
東京理科大学教授 狩野 紀昭
東海大学教授 師岡 孝次
慶応義塾大学教授 西川 俊作
法政大学教授 小林 直毅
成蹊大学教授 朝倉 孝吉
東京学芸大学英語科新入生合宿研修
東京都立大学助教授 森 建資
東京大学助教授 豊島 典雄
創価大学教授 村瀬 興徳
国士館大学講師 鶴川 武久
専修大学北海道セミナー
玉川大学教授 若槻 泰雄
産業能率大学海外学生訪日研修
日本女子大学附属高等学校生活研究セミナー
第14回大学共同セミナー
大学天文連盟変光星分科会
第16回十大学合同セミナー
日本建築学会
計測自動制御学会
第9回日豪合同セミナー
日本クリスチャン・インスティテュート
ライフ・ミニストリーズ



5年ぶりに復活した日豪合同セミナー——恒例の
ワイン・パーティーで歓談 ('88.6.4)

日本精神科看護技術協会東京都支部
建築セミナー'88
日本電気デザインセンター
ベスト外国語学校
アイ・ディ・シー
酒井薬品*
西武百貨店八王子店
京セラ*
日本生産性本部
エム・エフ・リース
コニカ
オリパス光学工業
V研究会
ヒューマンライフセンター
ブリヂストン
日水コンクリート水道本部
文化シヤッター
EYE
雪印物産
〔個人利用〕
リビングストーン折り会
東洋大学教授 小菅 伸一
堀 光男
■7月(103グループ、延五、七七三人)
明治学院大学教授 田村 剛
東京大学教授 和村 英一

お茶の水女子大学教授 坂本 満
中央外国語大学教授 宇佐美 滋
中央大学講師 石川 敏行
立教大学教授 高野 和基
東京経済大学助教授 栗原 彬
法政大学助教授 島田 和夫
国際基督教大学心理学夏季セミナー
慶応義塾大学教授 陣内 秀信
中央大学教授 榎谷 昭彦
東京大学教授 伊藤 成彦
東京外国語大学講師 木村尚三郎
上智大学教授 グスタボ・アンドラーデ
東京薬科大学ALIK 相山 長和
東京都立商科短期大学助教授 若林 俊輔
日本外国語大学教授 若林 俊輔
日本大学教授 三枝 充徳
駒沢大学助教授 谷敷 正光
お茶の水女子大学文教育学部新入生セミナー
お茶の水女子大学理・家政学部新入生セミナー
横浜国立大学教育学部八王子ゼミ合宿
東京大学教授 見田 宗介
東京理科大学教授 狩野 紀昭
早稲田大学助教授 鴨 武彦
早稲田大学助教授 川原 榮峰
中央大学助教授 山下 幸夫
中央大学講師 鬼頭 金剛
駒沢大学助教授 大久保 武
東京学芸大学短期大学英文学科学科総合講座「国際」セミナー
東京大学助教授 馬場 修一
中央大学助教授 中野 守
日本大学教授 佐藤 誠
成蹊大学教授 宇野 重昭
東京都立大学教授 長倉 康彦
早稲田大学助教授 小林 茂
学習院大学助教授 児玉 久雄
東京外国語大学教授* 門脇 卓爾
明治学院大学教授 小沢 重男
増田 茂樹
ESS

早稲田大学コンツェルト 石谷 行
法政大学教授 川端 潔
東京理科大学助教授 寺中 良二
駒沢大学助教授 寺中 良二
法政大学夏期英会話セミナー 千葉 立也
学習院大音楽愛好会リコーダーゼミ 千葉 立也
法政大学講師 播 里枝
明治大学教授 橋本 仁司
早稲田大学助教授 伊藤 成彦 橋本 仁司
日本大学教授 新川 正司
学習院大学助教授 富田 哲雄
青山学院大学講師 富田 哲雄
武蔵工業大学助教授 土井 雅博
中央大学通信教育部 阿部 齊
放送大学教授 田辺 敦子
日本社会事業大学教授 松尾 秀雄
名城大学短大助教授 赤尾 洋二
玉川大学教授 林 俊一
麻布学園百年史編纂準備委員会
東京都立神代高校
共立女子第二高校夏期英語合宿
共立女子第二高校ESSクラブ
第9回大学院共同セミナー
第3回日韓学生会議
東京大学・お茶の水女子大学キリスト者学生会
日本ワイルド協会
婦人労働問題研究会
国立遺伝学研究所
国際教育交流協会
朝日カルチャーセンター
文学教育研究者集団
東電学園大学夏季演習
C+F研究所
日本友和会
富士通多摩システムエンジニアリング
富士フアコム制御
ブラディ
ペナルティカルインストラメンツ
アルモニティ化粧品
全農農業機械部
日本分光工業
ヒューマンライフセンター
テージャー

予 告

●第145回大学共同セミナー

主題：東アジアにおける国際関係
——日韓・日朝交流史から学ぶもの——
期間：1988年11月11日～13日（金～日）

◇全体講義

諸国民の平和的生存権

国際基督教大学教養学部教授 笹川紀勝氏
(運営委員)

◇ゲスト講演

植民地支配清算の道

東京大学社会科学研究所教授 和田春樹氏

◇セクション演習

- A. 日朝文化交流史—古代と中世を中心に—
東洋大学文学部教授 鬼頭清明氏
- B. 近代の日朝関係—その歴史と現在—
奈良女子大学文学部教授 中塚 明氏
朝鮮画報社編集局副局長 全 浩天氏
- C. 日本と朝鮮の文化比較
東京女子大学現代文化学部教授 池 明観氏
- D. 冷戦と東アジア
国際基督教大学教養学部準教授 最上敏樹氏

●第146回大学共同セミナー

主題：ユングとフロイト
期日：1988年12月9日～11日（金～日）

◇ゲスト講演

フロイトとその弟子たち

広島大学教育学部教授 鐘幹八郎氏

◇セクション演習

- A. ユングとフロイト—ナルシズムを中心にして—
横浜市立大学文理学部教授 安田一郎氏
- B. ユングとフロイト—おとぎ話の分析をめぐって—
駿河台大学法学部専任講師 鈴木 晶氏
- C. ユングとフロイト—宗教観について—
青森大学社会学部助教授 入江良平氏
- D. ユングとフロイトの歴史性—人間と思想の関わり—
花園大学文学部助教授 村本詔司氏
- E. ユングとフロイト—夢分析を中心にして—
横浜国立大学教育学部教授 小川捷之氏
(運営委員)

●第147回大学共同セミナー

主題：管理社会を超える身体技法（仮題）
期日：1989年3月10日～12日（金～日）

◇セクション演習

信州大学教養部助教授 山本哲士氏
一橋大学経済学部教授 室田 武氏
演劇トレーナー 竹内敏晴氏
(運営委員) 立教大学法学部教授 栗原 彬氏

◇問い合わせ先＝企画室 ☎0426-76-8532（直通）

V研究会
酒井薬品*
東芝デザインセンター
日本コンサルタントグループ
日本生産性本部
安川電機
ブリヂストン
東芝MBA会
フォワード
(個人利用)
文学教育研究者集団
文学教育研究者集団
山口 ありか
荒川 有史

東京都立商科短大・立川短大茶道部
東京学芸大学助教授 並河 一道
学習院大学映画研究部
学習院大学助教授 藪内 稔
東京都立大学助教授 山本 清祥
中央大学通信教育部
明星大学通信教育部
東京学芸大学助教授 大井みさほ
武蔵大学講師 増田 実
東京学芸大学助教授 西園 芳信
駒沢大学教授 寺中 良二
武蔵大学教授 私市 保彦
慶応義塾大学教授 石坂 厳
慶応義塾大学教授 加藤 寛
東京学芸大学生活協同組合
東京大学社会科学部 慶応義塾大学
立教大学手話サークルひだまり
研究会
帝京大学明日の会
東京学芸大学文章文法研究会

東京理科大学人間関係ワークショップ
ブ・リユニオン
埼玉大学教授 清水 寛
東京工業高等専門学校日豪学生交流
実行委員会
中央大学生生活協同組合
慶応義塾大学英語会弁論部
東京理科大学人間関係ワークショップ
常磐大学教職課程
神奈川大学助教授 J・ボチャラリ
神奈川大学助教授 田中 宏
玉川大学教授 田中 宏
東京神学大学公開夜間神学講座
埼玉県立北高等学校看護学院
神奈川県立百合丘高等学校
日韓学生会議
英語ITC
経営工学研究会
関東学生オリエンタリング連盟
全国学生ME研究会
フランス語教育振興協会
大学英語教育学会

仙川バプテテスト教会
町田バプテテスト教会
文学教育研究者集団
歴史学研究会西洋史
「気流の鳴る音」ミーティング
東京リコーダー協会
星を見る会
小平教会
気流の鳴る音
子どもとつくる生活文化研究会
英語教育協議会
ライフ・ミニストリーズ
日本女子大家政経済学科卒業生の会
リビングストーン祈り会
東京都高等学校英語教育研究会
鶴川北教会
朝日カルチャーセンター
米輸入問題を手がかりにして食糧自立を考える国際シンポジウム
同人新理想社

編集後記

長雨は秋にまで及びそうな気配ですが、この夏のハウスの天気図は幸いなことに例年の常態を保ち、内外の人々を多数お迎えしました。開館して23年ともなると、大学教員や研究者になって再来される方もおられて、私達職員を喜ばせてくれます。「業務通信」にご紹介した湯本和子さんもその一人です。人間社会の常として、歳月が物事をより複雑にすることも事実です。8年来的懸案だった浄化槽は、当ハウスにとつて、いろいろな意味で難問でしたが、夏の到来とともに一気に解決をみることになりました（9頁参照）。加えて新館建設の準備も整い、施設・サービスの一層の改善を期したいと祈ること切なるものがあります。（能）

表紙の写真は中央大学カールトン・ゼミ短期留学を前にした研修で（本館ラウンジから撮影）。写真提供はR・フリーマン教授